

花登筐

氷山のこゝろ

②

「小僧狼」篇

氷山のゴトク ②

「小僧狼」篇



氷山のごとく② 「小僧狼篇」

昭和五十五年十二月十五日 第一刷印刷
昭和五十五年十二月二十日 第一刷発行

著者

花 登 筐

発行者

真 野 義 人

発行所

東京新聞出版局

東京都港区南二ノ三ノ一三
中日新聞東京本社
振替口座(東京)五―五四九七
電話 〇三・四七一・二二一(代表)
〇三・四七二・四四三(直通)

ISBN4—8083—0031—1

©1980 KOBAKO HANATO

ISBN 4—8083—0033—8

C0393 ¥ 0930E

印刷・製本

大日本印刷株式会社

氷山のことく②

「小僧狼」篇 ■ 目次

「憤 怒」

丸^{まる}本^{ほん}商店

半 匹 狼

小 僧 中 将

使われ大将

装画・さしえ／成瀬数富

7

66

131

172

215

〈前巻までのあらすじ〉

▼名古屋の間屋街・長者町に丸幸商店という洋品雑貨商があった。当主・幸一郎は、易占いに凝りすぎ、奉公人たちも方位で集められた。主人公・輪助もそんな一人で、北海道から雇われた小僧であつた。あまりにもひ弱なので、入店のとき、ごつさまと呼ばれる幸一郎の妻女ふくに即日解雇されようとしたぐらひだつた。▼そんな輪助が、ひよんなことから知り合つた丹羽屋の番頭・忠助から「うまい話には何かがある」ことをさとされ、商人として隠れた部分に何かがあると思われ、よくな頼られる氷山のような人間になれと教えられた。▼輪助は、雪娘のような隠居さまのおふじにせがまれて、小樽の話を聞かせに通つていゝうちに、身体の不自由なおふじを外へ自由に外出させようとしなゐ丸幸商店の冷たい仕打ちにおみね

とともに腹を立ててゐた。▼大正十二年九月一日、輪助と仁吉は大八車で拳母（豊田）の近くへ配達に出て東京の大地震を知る。親が東京にいる仁吉、おみねに頼まれた伝言を横浜のおふじの実家にまだ伝えてゐない輪助、二人は東京へ向かう軍のトラックの荷台に大八車ごと潜りこんだ。▼途中、仁吉は東京へ、輪助は横浜へと別れた。見渡す限り焼野原となつてゐる街角で仁吉は香具師かぐしのような男に声をかけられ、大八車に積んであつたステテコやシャツの木箱と三百円が入つてゐるという財布を熟慮のうえ交換した。▼焼け跡の小屋に住むおふじの実父服部一之助から、おふじが実の娘以上の条件で養女にされたとき、かなりの財産が丸幸に渡され、危機を救つたと聞かされた……。▼そのころ丸幸商店では二人が荷を持ち逃げしたと大騒ぎであつた……。

氷山のごとく

②

「小僧狼」篇

「憤怒」

輪助は教えられた通り、駅の方へ向かつて運河にかけられた橋を渡り、見送ってくれている一之助が見えぬ所まで来ると、そこで少し待って再び引き返した。その橋の上で何気なく向こうの橋を見て息をのんだ。

何と鉄橋がまるで飴のようにねじ曲がっているではないか。

それは横浜へ来て目撃した地震の傷痕の中で最も凄惨な姿であった。

(一体誰があげなことを……)

輪助も地震が人為的なものではないことは知っていた。しかしその無惨な鉄橋の姿はまるで、こびと

の国へ来た巨人がねじ曲げたものとは思えなかった。

輪助はもう一度、地震が起きたら、この橋もあのようになるのではないかと、おののくと慌てて車を曳いて小走りに橋を渡った。

輪助が仁吉と待ち合わせる場所へ着いたのは夕暮れ近かった。

東京へ行った仁吉がそんなに早く帰れぬだろうし、かなり長く待たねばならぬであろうことは覚悟していたが、とも角、目印の地蔵の傍らに車を停めて、道端の石に腰をかけようとしてはっとした。

その石が地蔵の首であったからである。

輪助はかなりの努力をして地蔵の足元へ首を運びながら、地震が地蔵の首まで飛ばしたことを知ると、再び新たな恐怖を感じたのは地蔵尊こそ子供の守護神であることを母から教わっていたからである。

その時であった。

「俺は河原の枯れすすき……」

か細く、けだるげに、まるで御詠歌のような歌声が背後から聞こえて来て、輪助は思わず振り返ると、朝にはなかった板囲いの小屋が浜側に出来ていて、その前で髪を紐で束ね、男もののシャツを着て、破れ穴でも見せまいとするのか風呂敷を羽織った十五、六歳の娘が、拾って来た板を燃やして缶で湯を沸かしながら歌っていたのである。

すると小屋の中から、これ又ステコ姿の父親らしい瘦せこけた男が姿を現すと

「ぎよ！ そんな歌が流行^{はや}ったから地震が起こったって噂だぞ！ だから歌うんじゃねえ！」

と叱りつけた。

「父ちゃん。地震は歌のせいじゃなくて、火山のせいって話じゃあ」

「火山か神さんが知らねえが、その歌が怒らしちまったんだ」

しかし、娘は又歌い出した。

「やめろって言うのにわからねえのか！」

「歌でも歌ってなけりや、やりきれないのよ！」

今これ以上の適切な表現がないと輪助にもわかるほど捨て鉢な娘の言葉に父親も言い返せなかったのか、ぶつぶつ呟きながら小屋へ入って行ったが、輪助はその何とも言えぬ哀調を帯びた歌声を聞きながら或ることを考えていた。

地震か火山や神の怒りか知らぬとその男は言ったが、輪助にもそれが自然の憤怒以外の何ものでもないと思われたからである。

そして又、それがあの飴のようにねじ曲がらせた鉄の橋を現していた。

つまり自然をそこまで怒らせた何かがあったのである。

輪助にもそれがその枯れすすきの歌のせいでないことはわかったが、枯れすすきを人々に歌わしめるよう

な世の中に原因があつたのではなからうかと考えた。

事実、当時日本は第一次世界大戦後の平和と軍縮の影響を受けて戦後恐慌に至つていた。つまり第一次大戦中、造船成金を生んだように日本の資本主義があまりにも底の浅いまま発展、成長してその反動が恐慌を招いたのである。

もし今度の地震が神の怒りとするならば儲ければ單純に生産力や労働力を増やし、不景氣となるや低賃金や長時間労働を強い、失業者を続出させ、米騒動を起こさせる、何の先をも読まぬ政治姿勢や社会機構に対する神の戒めであつたのかも知れなかつた。

しかしそこまでの知識を持たぬ輪助は、漠然と世の中に自然へのさからいがあつたのではないかと考えたのである。

そしてその自然のさからいの中に当然おふじのことも入つていた。

おふじが一之助の娘として生まれた以上、一之助に

育てられることが自然な状態であるのは確かであつた。

だから一之助が後妻を迎えるに当たつて、養女に出すことを考えたのは、やはり不自然と見るべきであらう。

しかし、そのことで一之助も今はかなり後悔を抱いていることや、又その時かなり苦しんだことも一之助の告白でよくわかつた。

だがそれに踏み切らせたのは恐らく丸幸商店からたつてとの話があつたからに違いない。

その時、既に丸幸商店は倒産寸前にあつたらしく、一之助に頼るしか助かる方法はなかつたのであらう。その条件がおふじを養女に迎え、一生大切に育てるということであつた。

「おふじは私の大事な妹のたつた一人の忘れ形見。後妻さんの継母に育てられいじめられるのは見るにしのびね、あ、です。どうか私達夫婦の娘として一生大切に

……」

と幸一郎に口説かれて、一之助もおふじの血の繋がりを持ったたった一人の叔父にならばとその気になったに違いない。

だが、その時の一之助には不自然ではあったが、わが娘の将来や幸福を考える父の心があった。

しかしである。幸一郎夫婦には果たして姪のことを、自然に心から考えたのであろうか――。

答は否である。

幸一郎夫婦にとって必要であったのは、おふじでなくして倒産を救う一之助の財産であったのである。

その証拠におふじが病氣となるや、明らかにお荷物と見て、大切にしているのは食事の別扱いだけ……。

それもおみねの手前があつてのことだけで、それともごつさまのおふくは恩きせがましく言っているではないか。

その上にある。

外の景色を見たがるおふじを隠居扱いにして、外部の者はおろか奉公人の目にも触れさせぬようにしているのである。

それが姪、いや店を救ってくれた恩人に対する自然な態度であらうか――。

もし幸一郎夫婦が自然におふじを遇するならば、おふじを跡取りとして認め、「おふじがうちへ来てくれていなければ丸幸商店は倒産していたのです」と公表して当然であらう。

そして将来誰を養子に迎えるにしても、主人の名義はあくまでおふじにしておくか、それとも海の見える山の別宅にでも住まわせてへ永久に面倒を見て大切にするべし」と伝えるのが義務であらう。

それなのである。一之助も指摘したようにその分の金を確保しておくどころか、不景気になったからと、たった一つ守られていた大切な扱いの食事まで悪くされているという――。

それが自然な人間のやる態度であらうか。まさしく自然へのさからいではないか。

(ようし。おらもひとつ地震になってやるだか……)

輪助は怒ったのである。

地震が不自然な人間に対する自然の憤怒とするならば、丸幸商店に地震を起こして警告でもせねば幸一郎夫婦は察しぬであらう。

輪助は考えた。

どうやって地震を起こすかである。

丸幸商店へ帰って幸一郎に

「なして約束を守ってあげぬのか」

と責めることは簡単であった。

しかし、その約束を知った輪助を幸一郎やおふくが放っておく筈はなからうし、もし暇でも出されればおふくがこの先どうなるか火を見るより明らかであった。

(守ってあげねばならね……)

おふくを守りながら幸一郎に約束を果たさせねばならないのだから難しいと、輪助は腕を組んだ。考える時間はうんとあった。

その時である。

海風に乗ってぶーんと煮ものの匂いが輪助の鼻に伝わって来ると、輪助の腹はぐうと鳴った。

考えれば朝から何ひとつ喰べものらしいものは口にしていない輪助であった。

あの焼死体を目撃したり、地震の無惨な様相を呈する町の中で神経までが異常になっていたせいであろうか、感じなかった空腹感が今急に輪助を襲ったのである。

輪助は一之助から貰った木箱の蓋を石で何とか開けて中を見た。

中には矩形型の缶詰めがぎっしりと詰まっていた。

輪助はその一つを手にとって見た。

英語でやたらと何か書いてあり、勿論読めはしな

つたが、皿に何か茶色い物が盛ってある絵がかいてあるところを見ると喰べものに違いないと開けようとしたが蓋はなかった。

「はて……」と輪助は首をかしげたのは、輪助は丸い缶詰めなるものの存在することは知っていたが、手に取ったこともないし、ましてや矩形の缶詰めなど見たこともなかったからである。

輪助はこの缶詰めを開ける為にはと考えて、輪助に空腹感を甦らせた犯人である、煮ものをしているかの枯れすぎの娘の傍らへ行き

「出刃包丁はねですか」

と聞いていた。

娘はちらつと輪助を見ると

「普通の包丁はあるけど……」

「そんならとがったものは何かねですか。これ開けてです」

輪助は娘に缶詰めを見せた。

娘は缶詰めを手にとって裏側を見ると

「これで開けるのよ」

と裏についている太い針金で出来た鍵の形のを外した。

「それどう使うんです」

娘は缶詰めの胴体にある留め金のようなものを起こして、その鍵の形の物に巻きつけくるくる廻すと、何と缶詰めの上の部分の部分が切れて来たから輪助は驚いた。

「そりや何だ……」

いつ小屋から出て来たのか、父親が缶詰めから現れた桃色とも朱色ともつかぬ得体の知れぬ中身を覗きこんでいた。

「コンビーフよ」

「何だそりや……」

「舶来の牛肉よ」

さすがはハイカラな町に住む娘だけあって、よく知っていると感心していると、父親の方は解せぬのか

「舶来の牛肉だと。それじゃすき焼きにしても喰うのか」

「何言ってるの。このままだって喰べられるのよ」

娘は指でつまんで喰べると「おいしい——」と言ってから輪助を見て

「ごめん。あんたのだったね」

と缶詰めを返そうとするのを父親が素早く取り上げて胡散臭（ごさんくさ）そうに缶詰めと輪助を見比べてから

「お前、こんな物どうした」

と聞いた。

「貰ったです」

「貰っただと……。舶来のこんな物を地震の後でどこ誰がくれるんだ。おい、お前どこかで……」

「いや本当に貰ったです。石川町の服部一之助って人が、川の傍の倉庫から出してくれたです。売るなり喰べるなりしろって」

「ああ、あの交易屋さんの服部さん……」

娘は素っ頓狂な声を出す

「父ちゃんそれなら本当だよ。一洋軒もあそこで舶来のソースなんか分けて貰っているもの……」

「本当だな……」と父親は念を押して缶詰めを返そうとしてちょっと中身をつまんで喰べると

「こりやうめえや」

と惜しそうに返しかけたから

「半分ほど取っていいです」

と輪助はそう告げていた。

「ほんと！ それならさ、あんた私んちの雑炊だけ喰べない」

「んです。頂きます。車をこき持って来ますから」

輪助は急いで大八車を取りに行った。

輪助が車を曳いて来ると父親は尚もコンビーフをつまみながら

「きよ、お前は一洋軒でいつもこんなうめえものを喰っていながら、父親の俺に持って帰ろうとしなかつ

「なんだな」

と言ったところを見ると、どうやら娘は一洋軒なる西洋食堂で働いているらしかった。

「父ちゃん。私達だってお客に出した残りのほんの僅か、しかも月に一度ぐらいいしか喰べさせてもらっちゃいないし、新しい開けたての缶詰めなんて初めて喰べるのよ」

そう言いながら父親の手の缶詰めを引ったくって

「調子に乗ってそう喰べないでよ。これ一個が二円や三円はするんだから」

「何だと！」

父親も驚いたらしいが、輪助も驚いた。

すると父親は車に積んである木箱を見て近づいて来ると

「お前、それみんなこの缶詰めか」

「そだと思います」

「一体幾つ入ってるんだ」

と鋭い眼つきで聞いた。

「知らねです」

「数えてみる！」

すると娘がとめでもするように

「父ちゃん、雑炊が出来たよ！」

と叫んだが

「うるせえ！ おい俺が数えてやるからお前喰って来な！」

輪助に顎をしゃくってみせたから、仕方がなく輪助は娘の傍らへ行ったが、眼を血走らせながら木箱から缶詰めを出している男の姿を見ると、薄気味悪くなつて来た。

そんな父親を娘もちらりと見ながら

「又病気が出た……」

と呟くのを聞くや輪助は益々気味悪くなり、一刻も早くここから退散した方がよいとは思ったが、仁吉との待ち合わせ場所は目と鼻の所だしと困っていると父